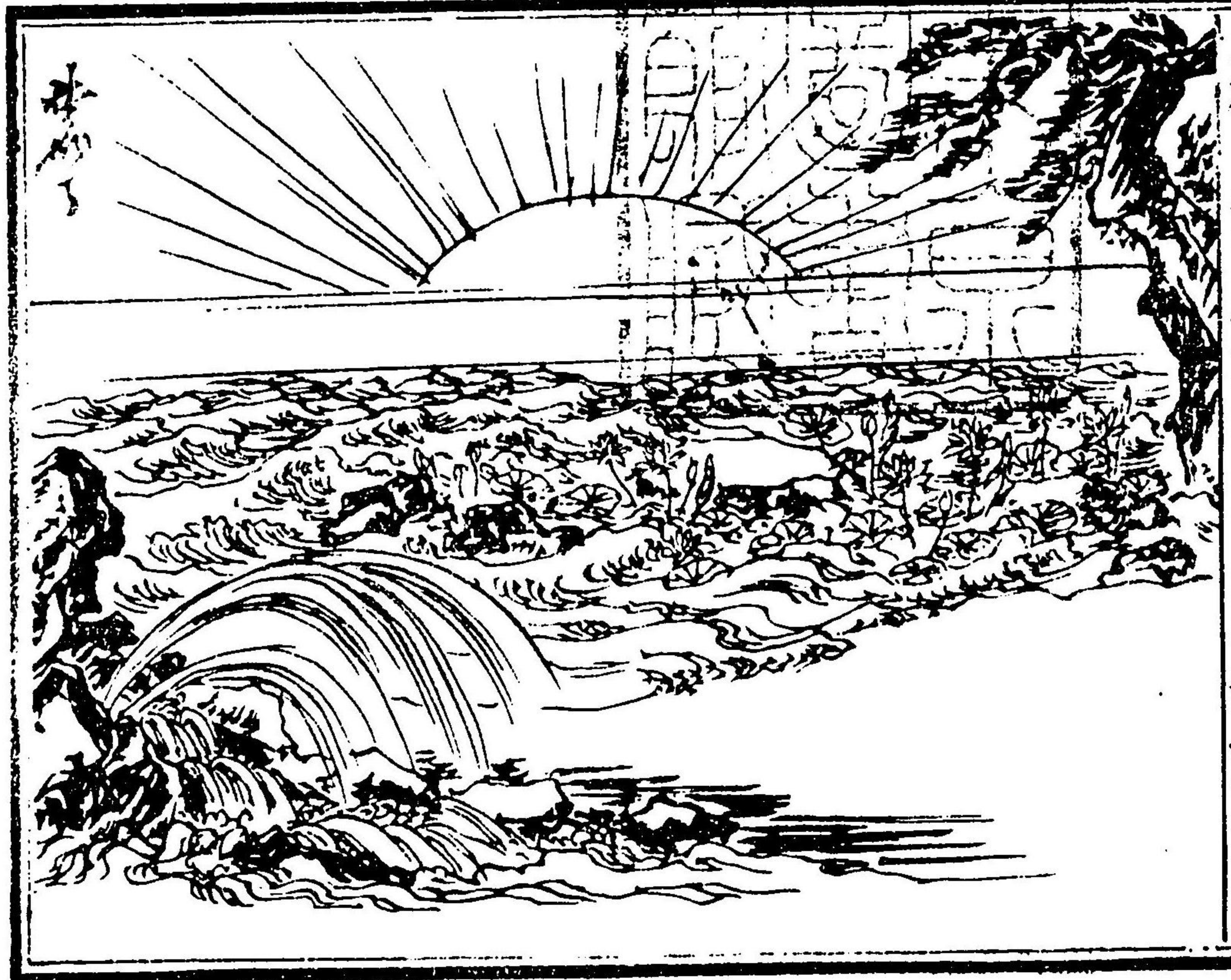


叙此の聖迹四傳ハ未ダ文字を
 習ヒざる兒童をして我高祖
 の廣大なる御慈徳を悟らし
 めんとして編ヒざるかれを
 固より大人ニ満足を手へん
 との意ニ何らぞ然れども曉
 斎翁の妙筆大人をして自ら
 高祖御在世の有様を追懐せ
 一むるをまゝ疑ヒを容れず
 されを兒童大人れ一あへて
 不思議の信心を發生し居あ
 り常寂の都ニ遊ふを得る
 と恐らく此の四傳の右ニ出
 るもの無りるへしと云尔
 浴乙酉春
 編者識

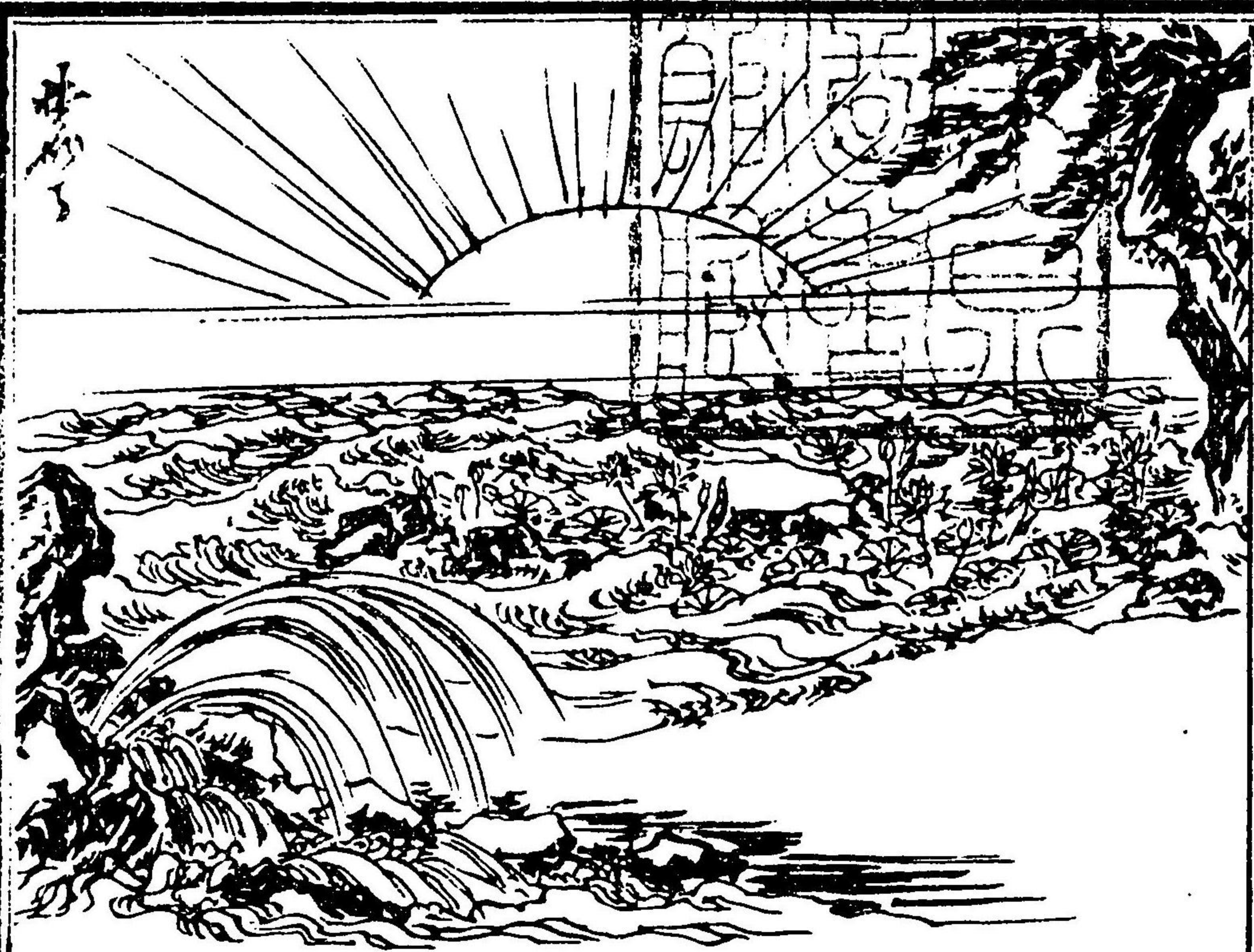
御降誕の時春時白蓮華開き平
 地ニ清泉涌出するの奇瑞あり



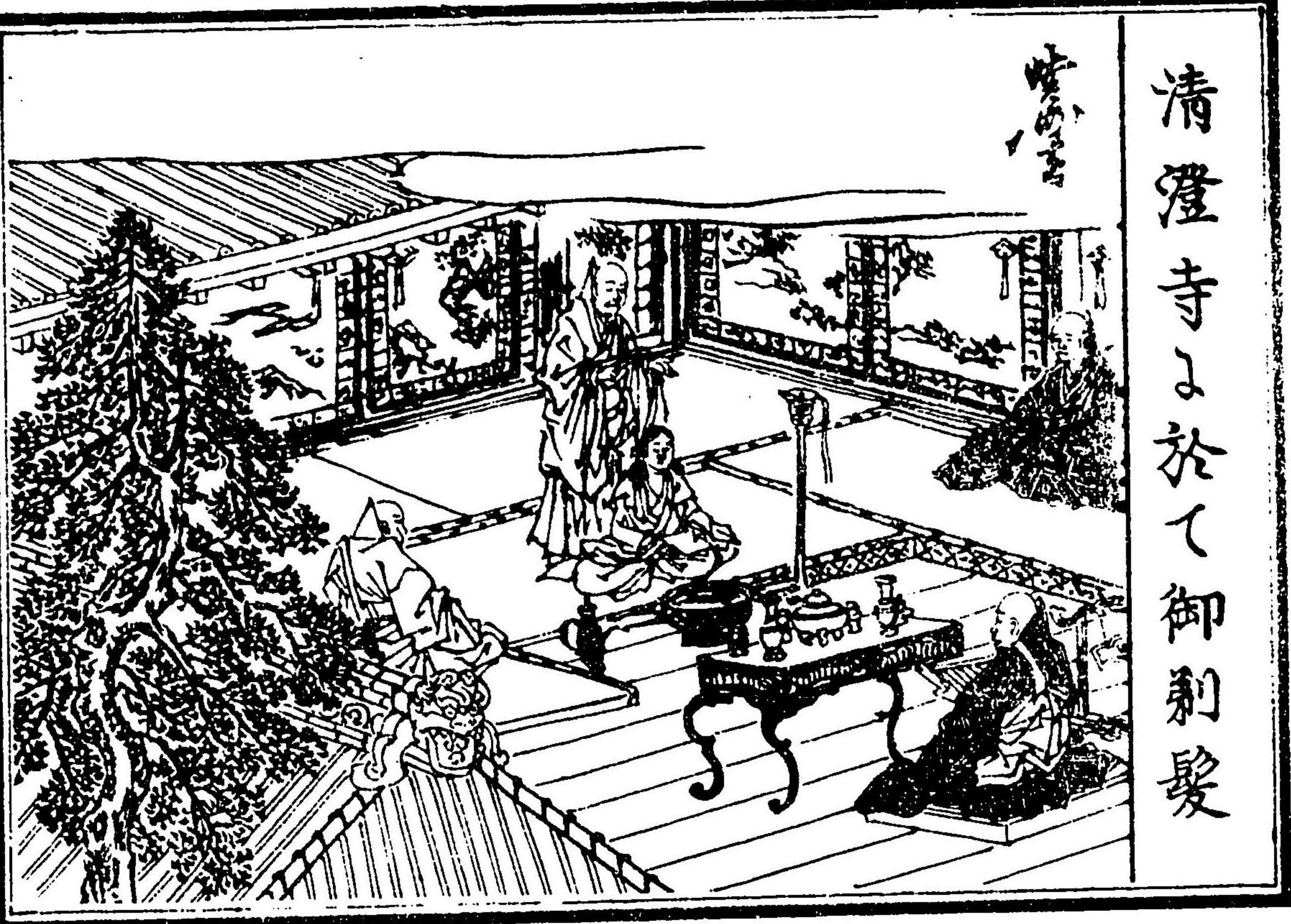
水

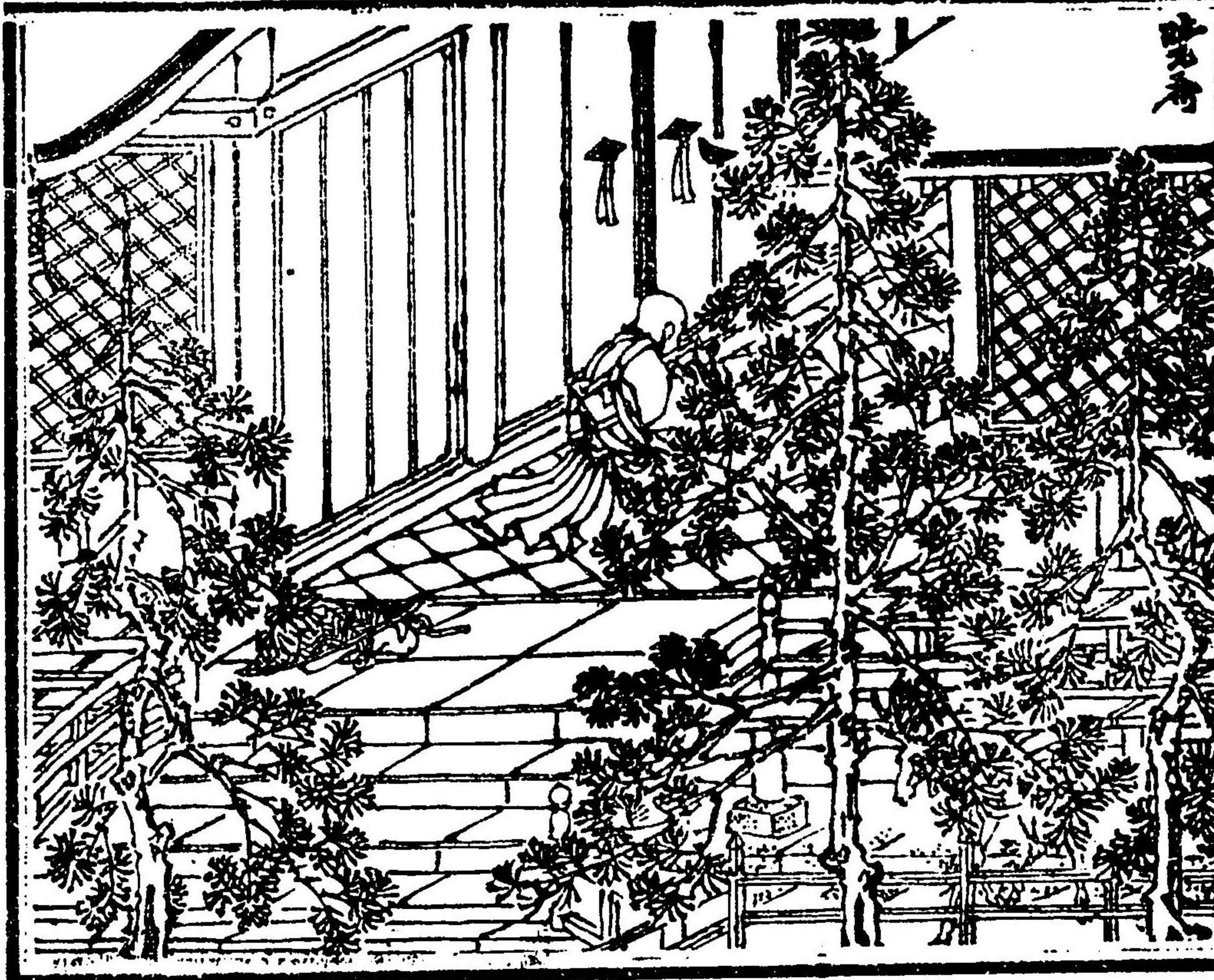
叙
 此の聖迹四傳の未だ文字を
 習えざる兒童をして我高祖
 の廣大なる御慈徳を悟ら
 めんとして編とさるかれを
 固とり大人に満足を手へん
 との意ありあらむ然れども曉
 斎翁の妙筆大人をして自ら
 高祖御在世の有様を追懐せ
 りむるにまじ疑ひを容れず
 されを兒童大人にあへて
 不思議の信心を發生し居あ
 り常寂の都に遊ふを得る
 恐らく此の四傳の右に出
 ずもの無りるへしと云ふ
 編者識

御降誕の時春時白蓮華開き平
 地より清泉涌出するの奇瑞あり



春時





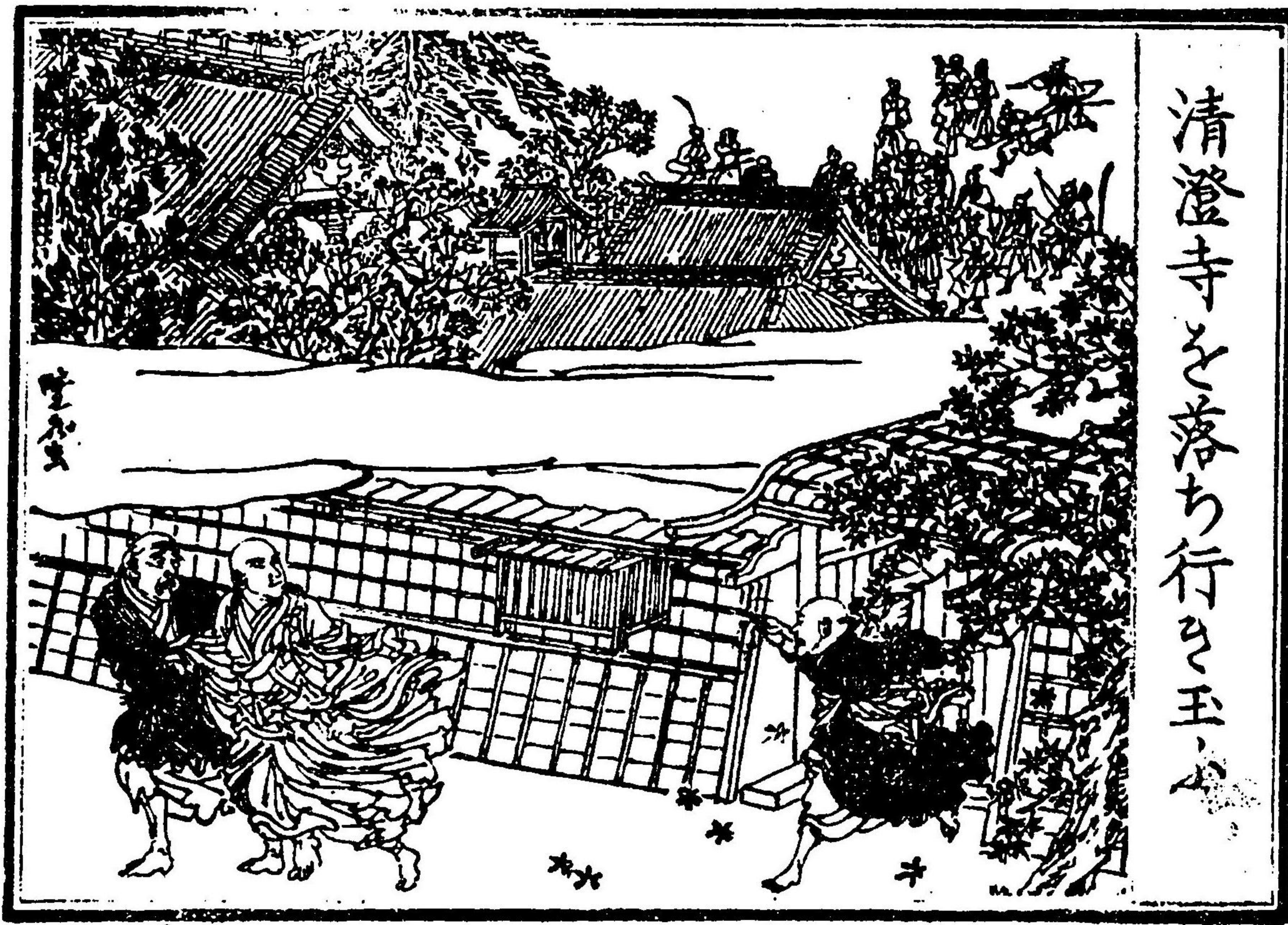
奈良春日神社へ御参詣

時考

五十鈴川の太廟に詣て妙法弘通を誓ひ玉ふ

鳥院





清澄寺より落ち行り玉ふ



建長五年三月廿八日旭日向
ひ始て題目を唱へ玉ふ

建長五年



父母を教化して再び鎌倉よ
趣きたまふ

紫



相州米ヶ濱の榮螺高祖の神
通に依て悉く角を失ふ



天台の学匠成弁松葉谷の御
庵を問ふて御弟子とかる



名越の樹下よ清泉を祈出
玉ふ今の日蓮水是あり

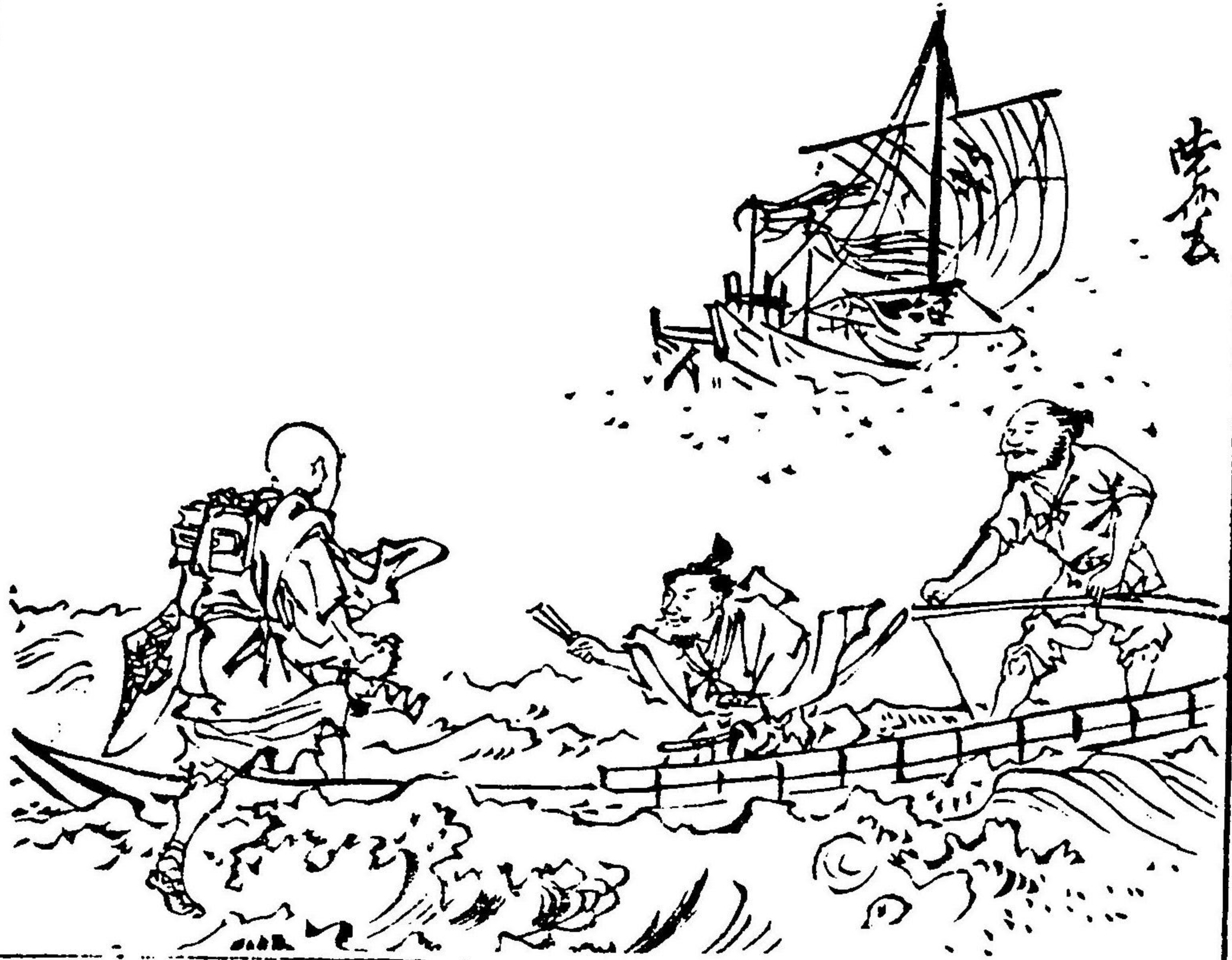
進士善春帰伏して檀越とある



善春の帰伏

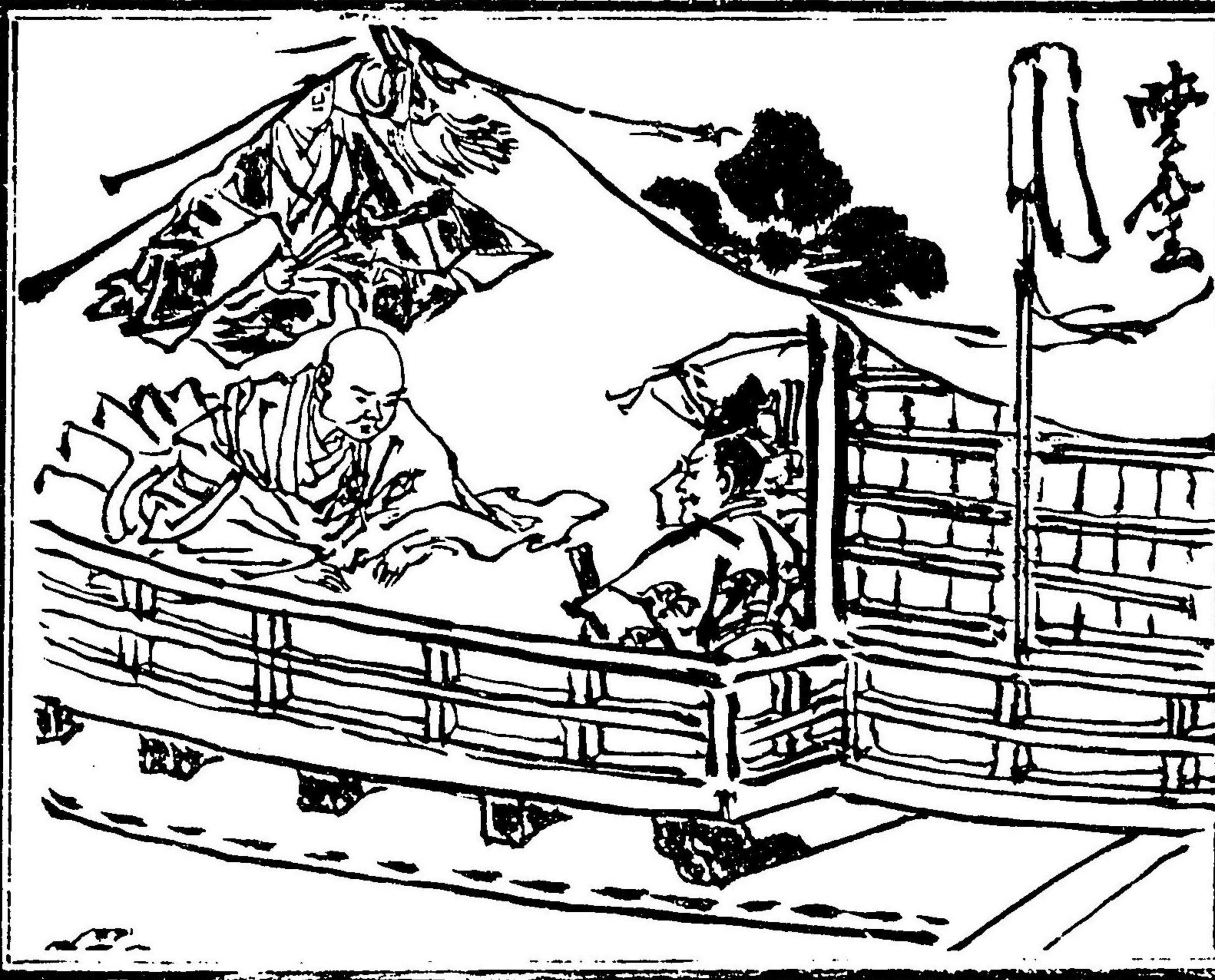
岡らぎ土木氏の船に乗合せらる

紫雲



富木氏舟中よて高祖よ帰伏し
檀越たらんとを約す

檀越



鎌倉市中に於て四箇の格
言を主唱し玉ふ



駿州岩本實相寺に入り立正
安國論を著し玉ふ



惟仁の巻

駿州岩本實相寺に入り立正
の講筵を開き玉ふ

惟仁の巻





大学三郎は安国論を示し玉
ひ行文の潤色を乞ひたまふ

惟之安国論



與公岩本を出て高祖を尋
ひたまふ

惟之安国論

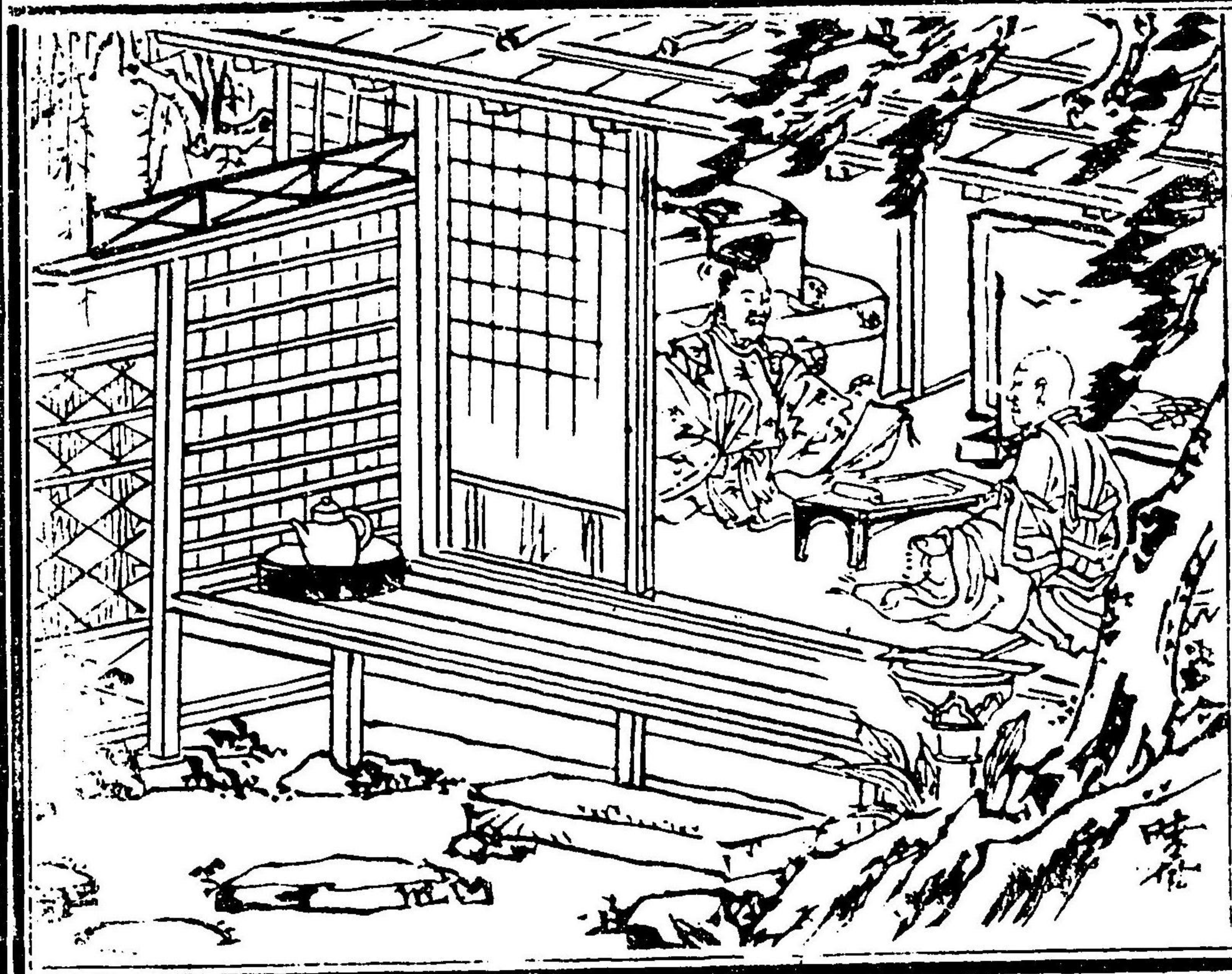


法賊松葉谷の御庵を焼く奉
る并に猿猴の供事



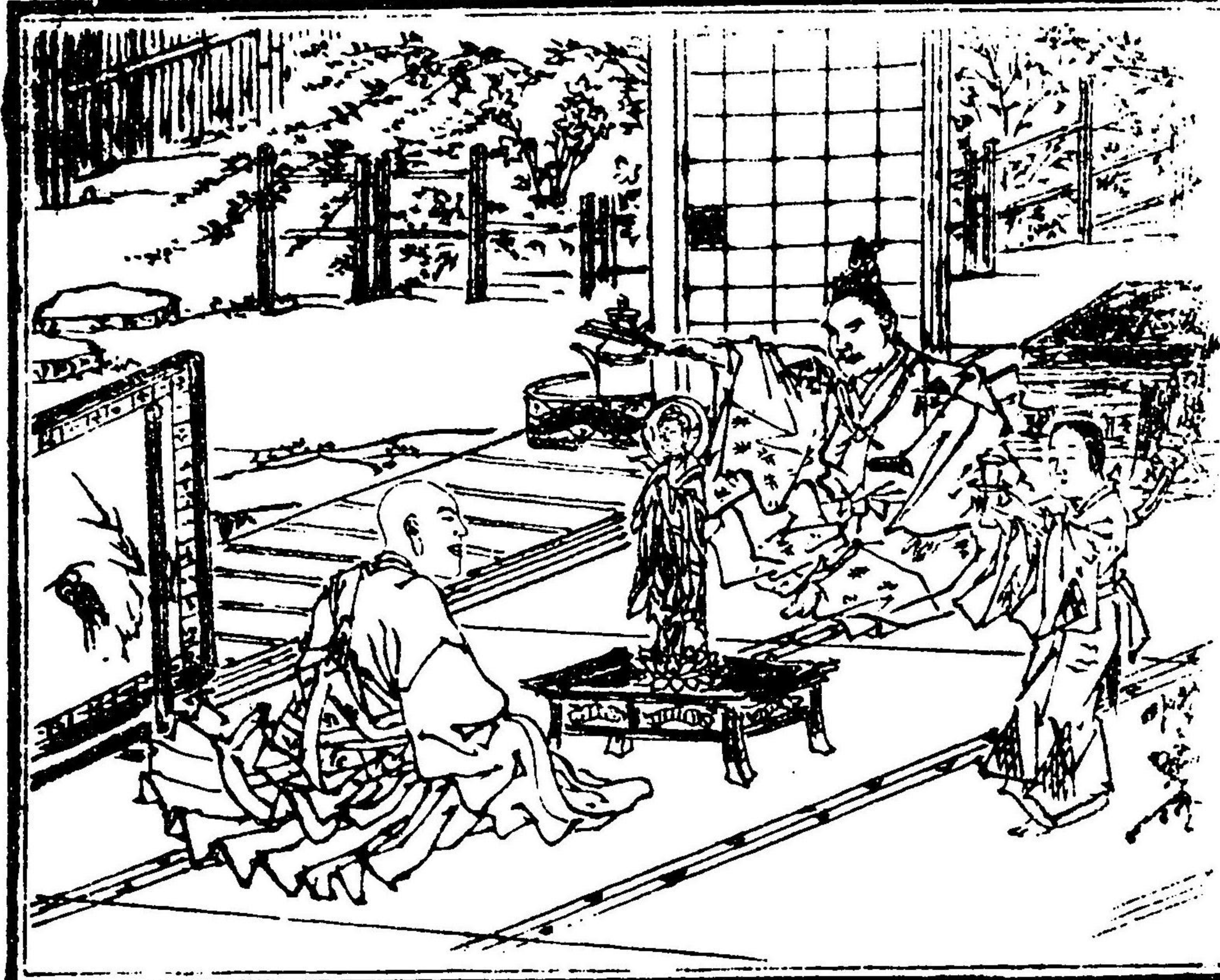
時頼に見えて切に謗法罪の
重大あるを論し玉ふ

吉田兼益の神道の奥義
を傳せりたまふ

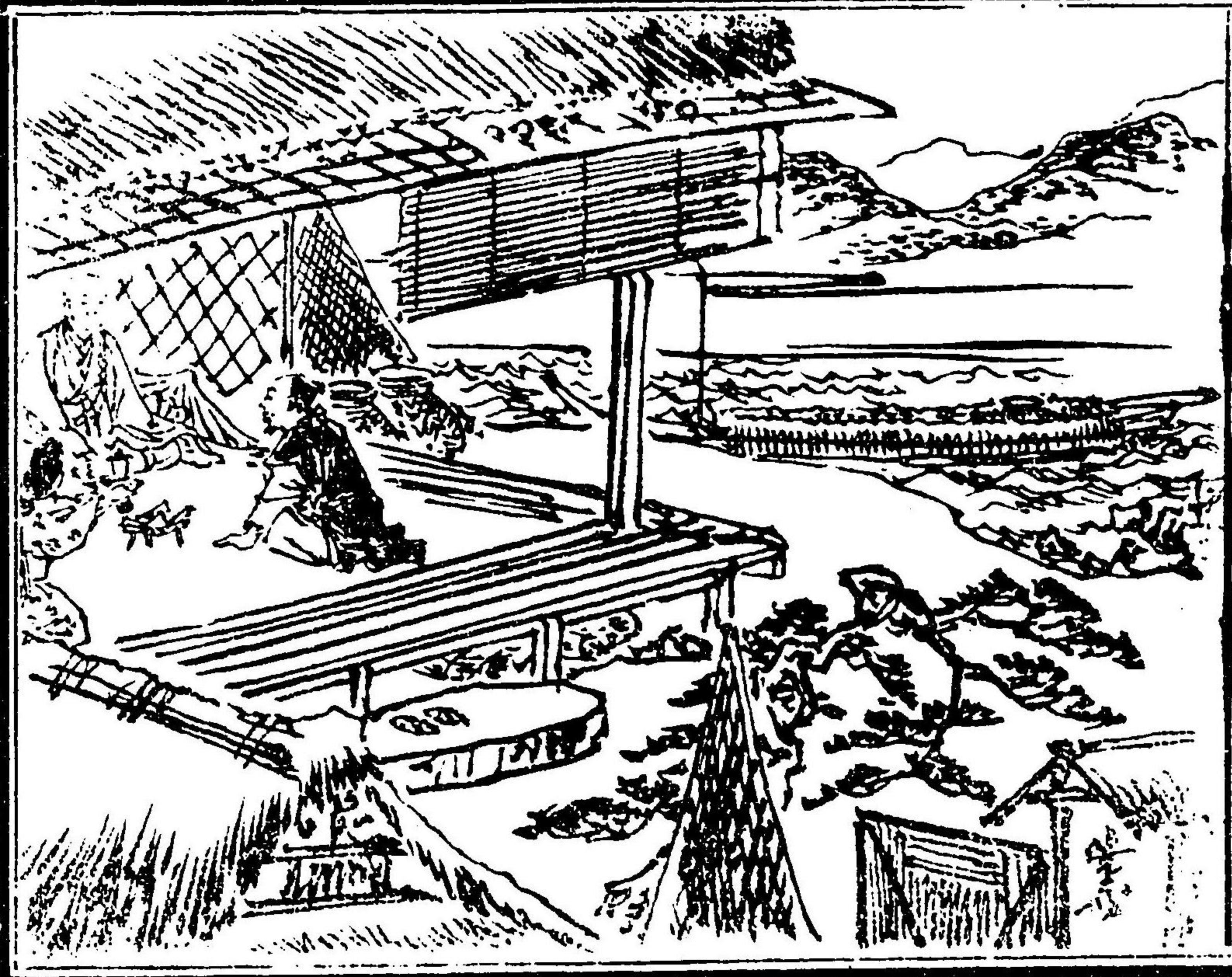


伊東御流罪の時朗公御隨
行を乞ふて難よ遭ひ玉ふ



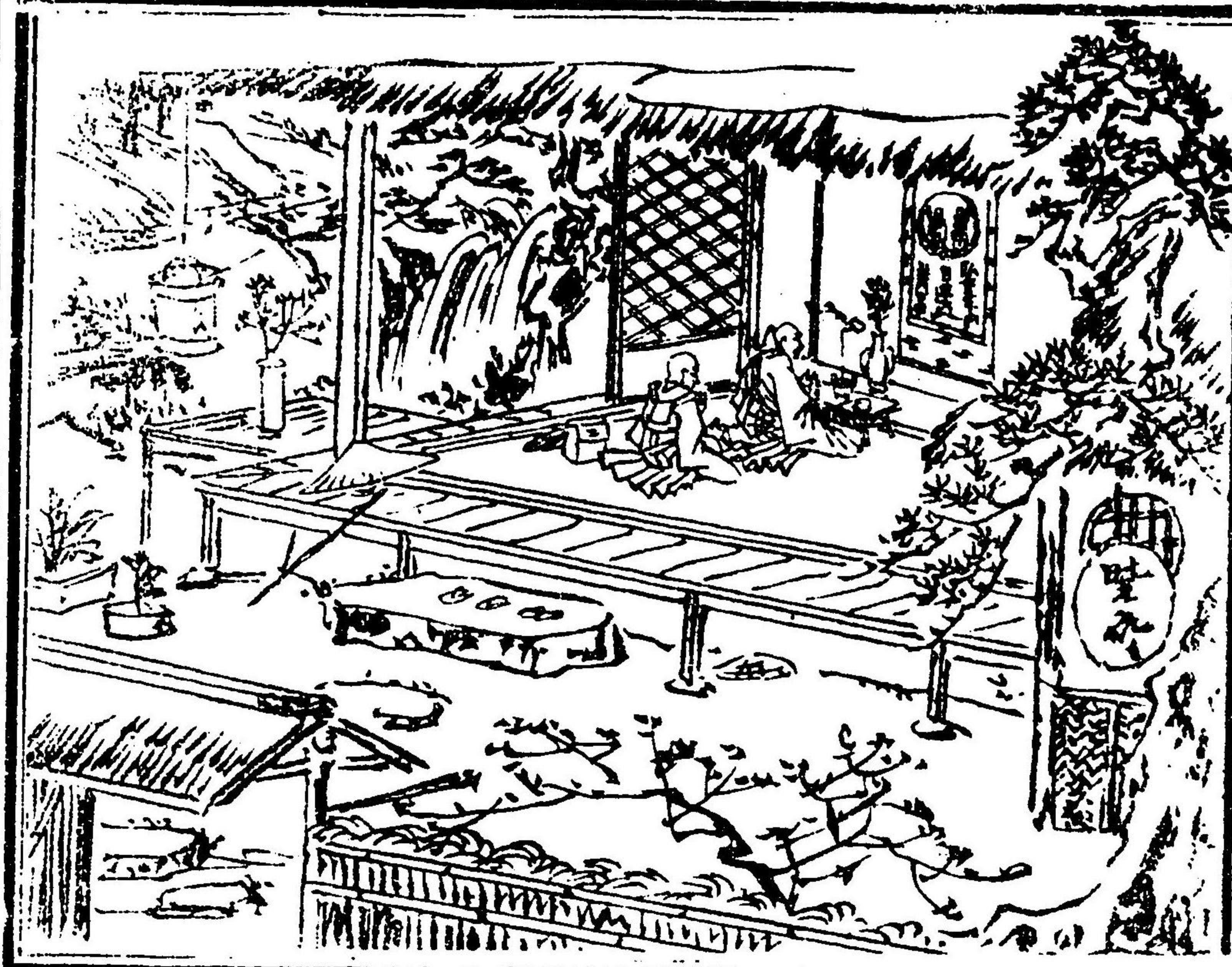


伊東朝高立像の釋尊を
たてまつる



船守弥三郎檀越とある

普門禪師の一輪二菩薩の画像
を関眼一玉ふ



松葉谷の御歸庵

傳松葉谷の御歸庵



母堂の痞侵既終を祈り玉ひて
更よ四ヶ年の命を延がしめ玉ふ

業

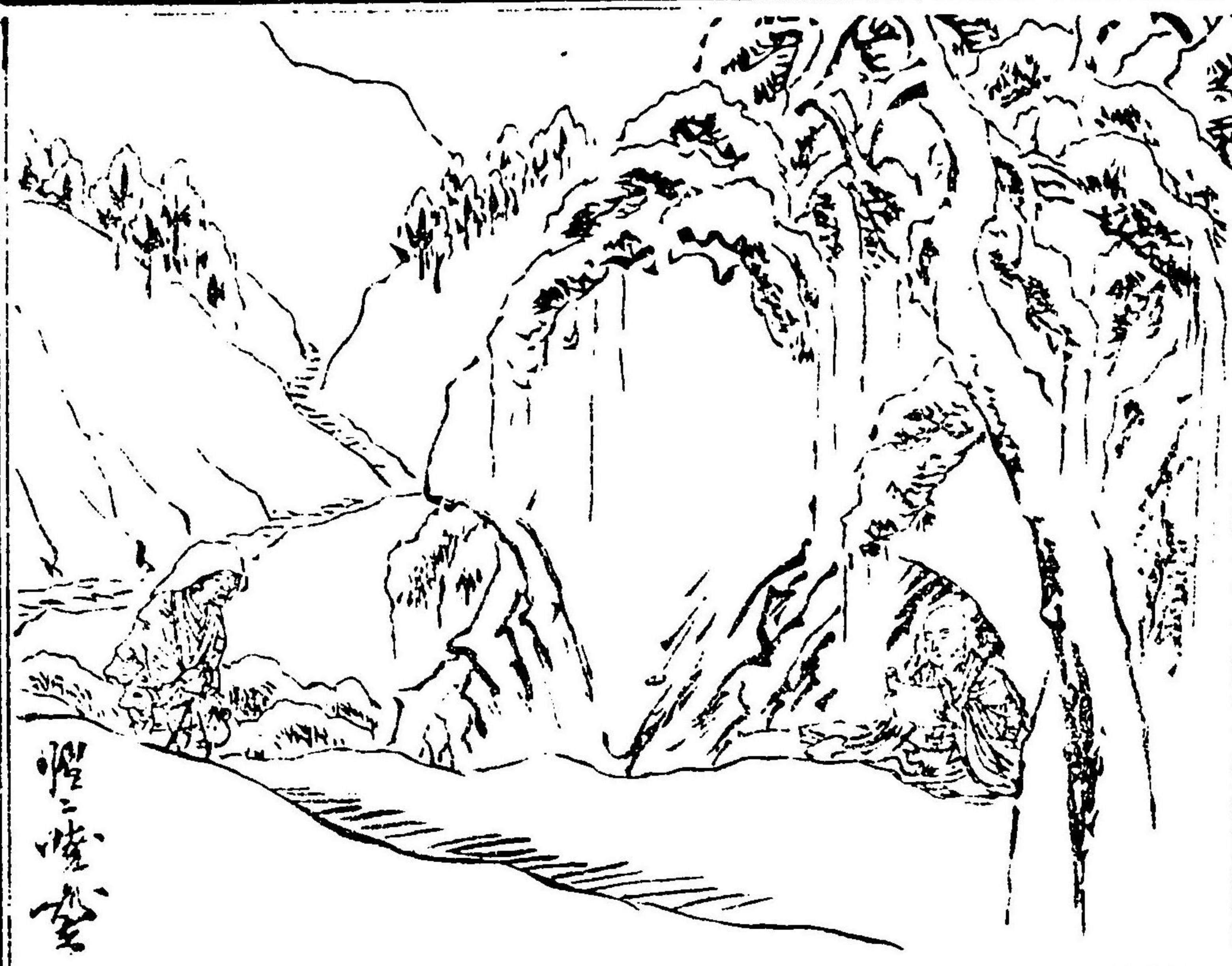


小松原にて東條景信高祖
を害し奉らんとも

壁
画

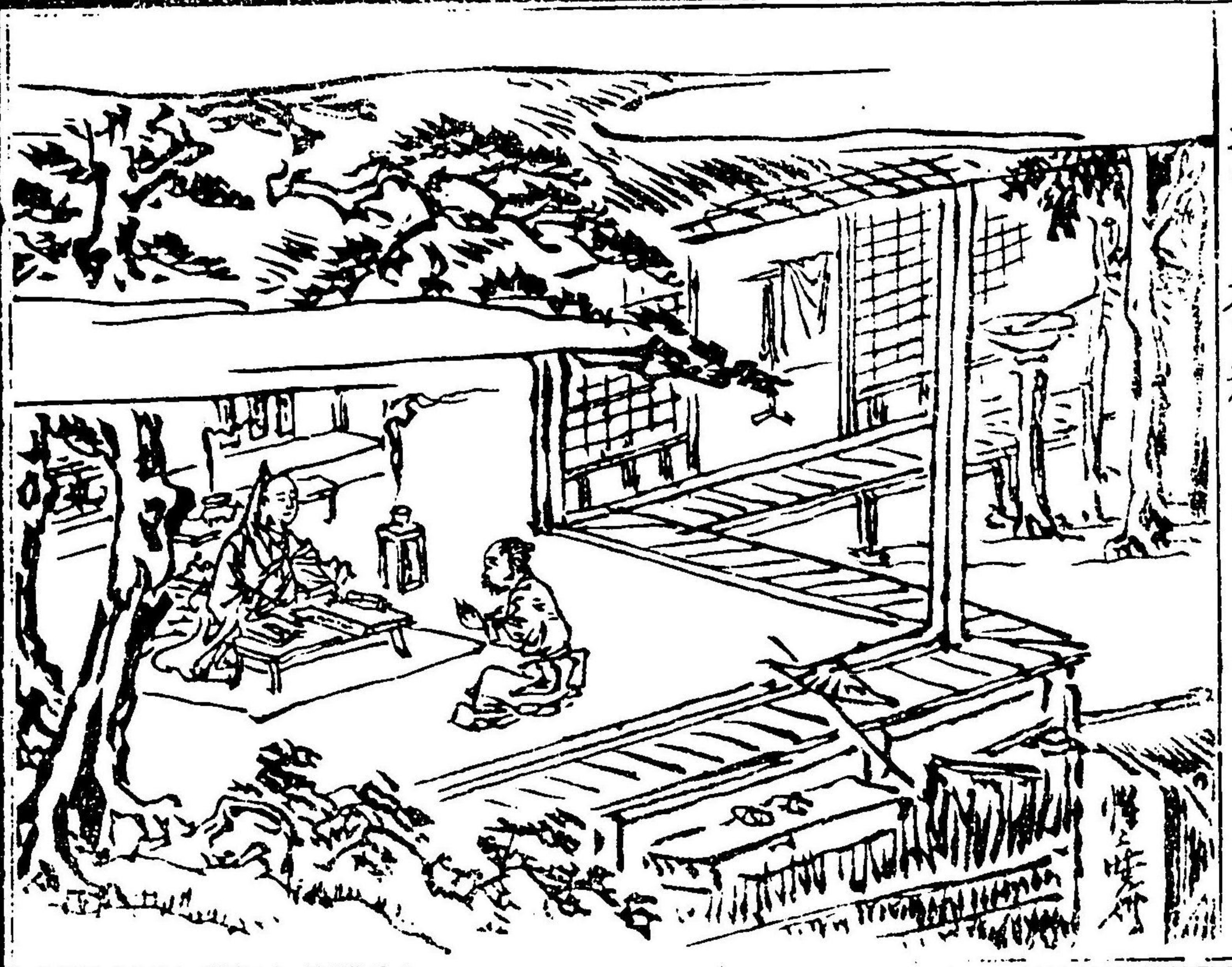


小松原の御難より重傷を負ひ市
坂の洞中より於て御治療



惟三堂

野州藤原村の庄屋次郎助化導
より預り檀越とある



惟三堂

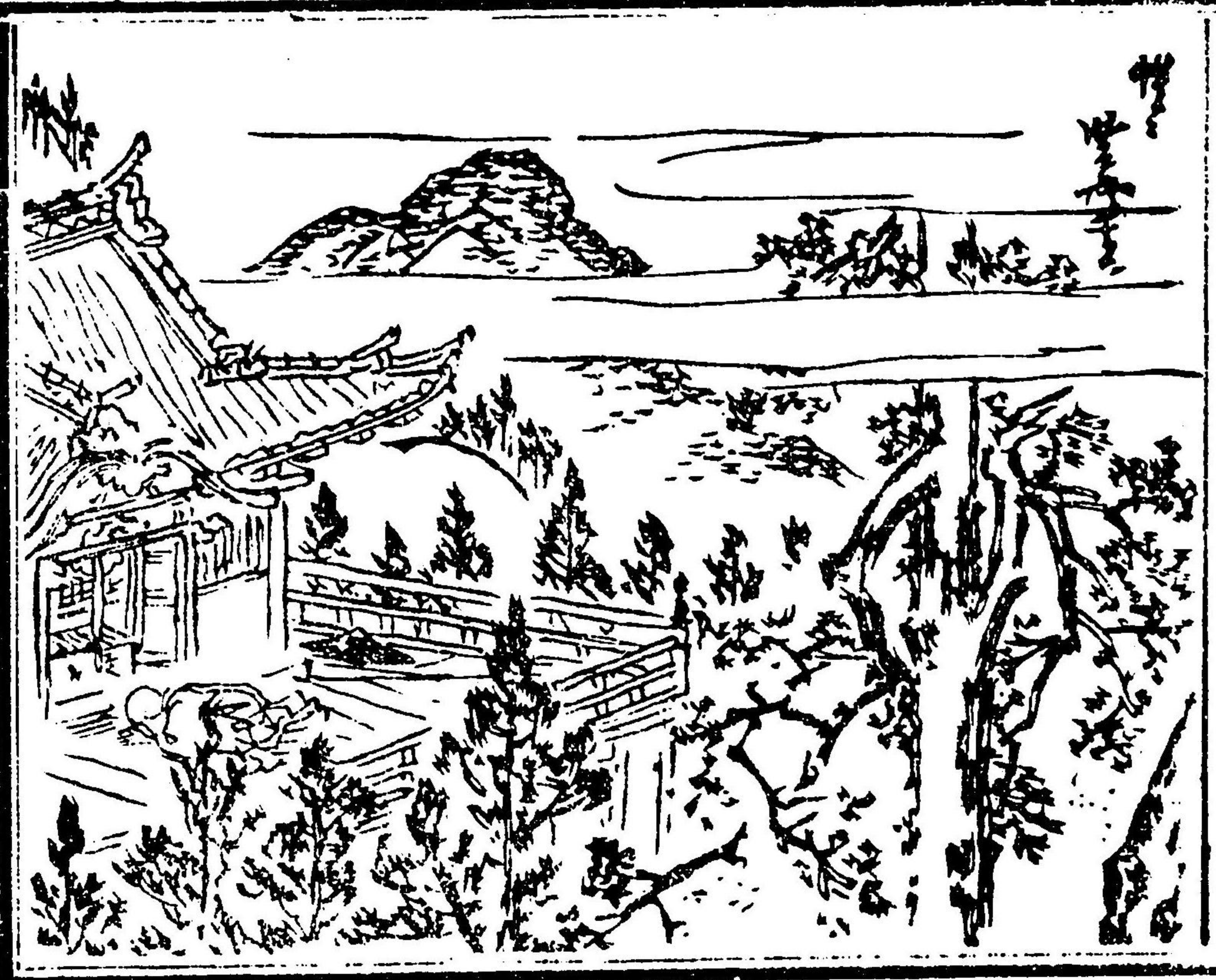


上総国佐久間の法華堂御供養

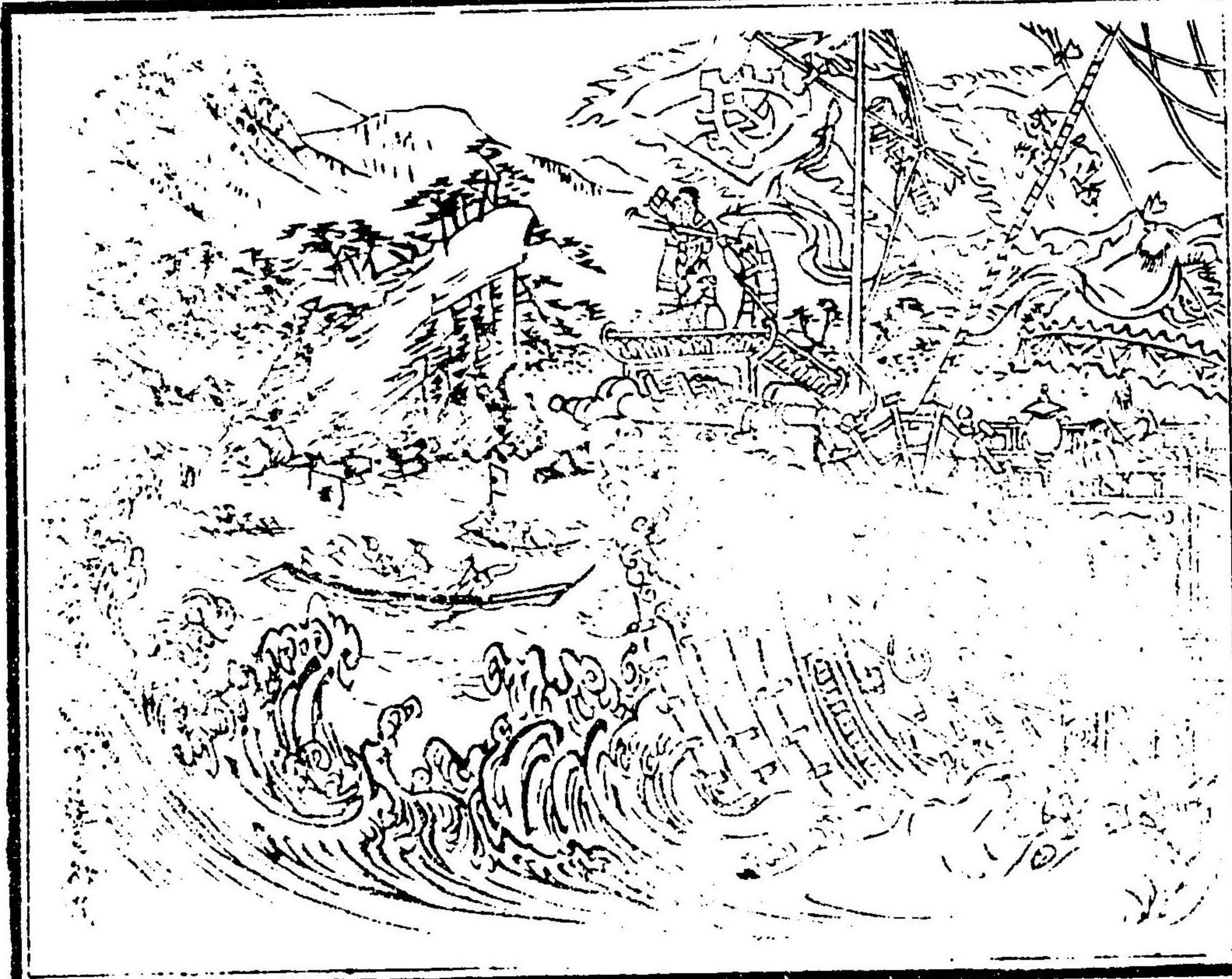


那須野原經題石の圖

笠森寺御参詣并御祈願



蒙古賊軍襲來安國論の豫言虚しからむ



龍口の御難は老婆胡麻餅
を献上せし



龍口の御難の圖



惟時赤三

北條副元帥靈夢を感じて
大に高祖の處刑を悔也



明治十八年五月八日 御届
明治十八年五月廿日 出版

編輯兼 東京府平民
出版人 増田吉兵衛
神所三仲番

金六錢

續編近刻

北條副元帥靈夢を感じて
大に高祖の處刑を悔也

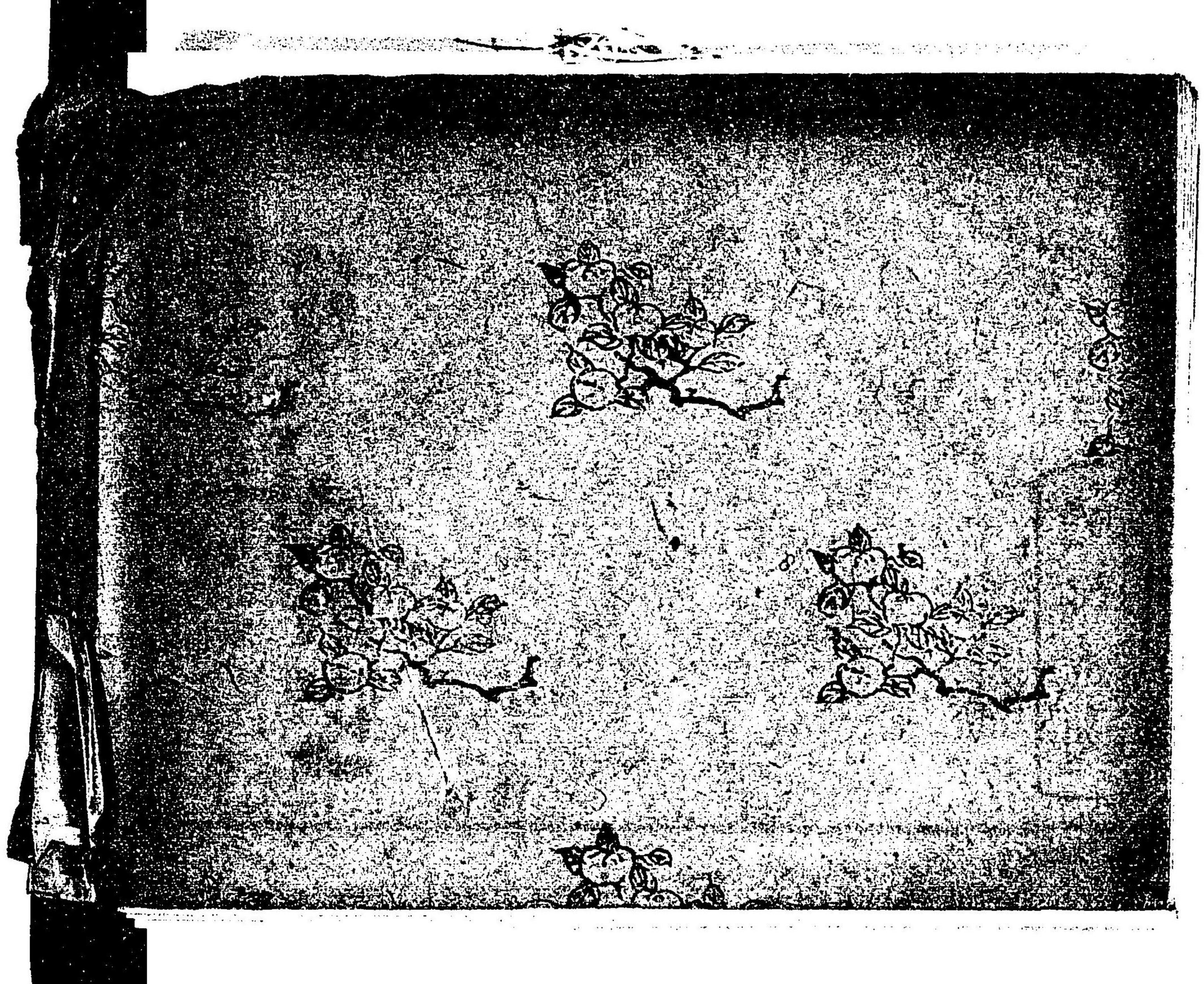


明治十八年五月八日御届
明治十八年五月廿日出版

編輯兼 東京府平民
出版人 增田吉兵衛
印刷 三井印刷

金六錢

續編近刻



特57

901

020084-000-7

特57-901

日蓮大菩薩聖迹図伝

暁斎/画

M18.5

ABH-0286

